

# 公立小学校における学級崩壊の心理力動

— Bionの集団理論からの考察 —

岡 島 真 一\*

Psychology mechanism of disorder in the classroom in elementary school

— Consideration from group theory by Bion —

Shin'ichi Okajima

## 要 旨

Bionの集団理論とスケープゴートの観点から、准スクールカウンセラー（以下SC）として筆者を含む二人（男女）のSCが関わった公立小学校の学級崩壊事例について考察した。

学校は学級崩壊クラスをスケープゴートとして維持し続けた。クラスの担任はスケープゴートとなりクラスの児童から攻撃を受け、同時に学校からも無力な教師のラベリングを受けていた。また、学校は学級担任と学級そのものをスケープゴートとして維持するために、SCの活用に消極的になり、SCに対しても無力感や能力のなさを投影した。またSC両名は、その無力感をお互いに投影しあい、無力感による理想化と価値下げを行った。

キーワード：スクールカウンセラー、学級崩壊、スケープゴート、Bion

## I. はじめに

平成7年4月から全国各都道府県に学校カウンセラーが配属されることになった。そして、某市のスクールカウンセラー活用事業は、臨床心理士指定大学院の院生および修士を准スクールカウンセラー（以下SCと呼ぶ）として市立の小学校、中学校、高校へ派遣するというものである。この事業において、X年より筆者を含むSC2名（男女）が公立小学校に派遣された。この公立小学校における学級崩壊の事例を報告する。

本論文の目的は小学校における学級崩壊の事例を報告し、Bionの集団理論に基づいて事例を理解し整理することである。そして学級崩壊クラスおよび担任教諭をスケープゴートの対象とした学校の様子を考察したい。

## Ⅱ. 事例

### 事例の概要

公立小学校。児童数454名（1学年2～3クラス、特別支援学級2クラス）。教員数30名（女性23名、男性7名）。スクールサポーター7名（女性5名、男性2名）。M先生（スクールサポーター20代男性）。SC配置初年度である。SC担当教員のY先生（6年生学年主任、40代男性）、S先生（特別支援コーディネーター、50代女性）からの要望でSCはサポートとして授業に関わる。

学級A（5年生）：担任G先生（30代女性）1学期～2学期前半の間、学級崩壊として学校の大きな問題とされていた学級。

学級B（6年生）：担任X先生（30代女性）2学期頃から徐々に学級が荒れだし、結果的に学級崩壊として問題とされる学級。特に学級の数名の男子（M男、C男、O男他）と女子（F子、O子他）の問題行動が崩壊の要因として学校から問題視されていた。

派遣された准スクールカウンセラー2名は男女とも臨床心理士指定大学院修了後間もない若手であった。SCの来校は一人につき年間20回と決められており、同日に行く日もあれば、別々に行く日もあった。

事例において、筆者である男性SCを「SC1」、パートナーの女性SCを「SC2」と表記する。またSCと表記したときは「SC1」と「SC2」の両方を指す。

SCの発言を〈 〉、教職員の発言を「 」、児童の発言「 」とする。

### 第1期 X年7月17日～X年8月22日

SC1来校2回（学級A=0回、学級B=2回） SC2来校1回（学級A=0回、学級B=0回）

第1に、第1期における学級Aとの関わりについて述べる。1学期の終盤にSC1はY先生からいくつかのクラスが気になるので学級崩壊の研修をしてほしいと話された。SC1はニーズへの対応を優先した。SC2ではなくSC1が頼まれた理由を考えず研修を引き受けた。研修を引き受けたことについて後日SC2へ報告した。研修後Y先生からSC1へ学級Aが問題であると伝えられた。

そしてSC1と学級Aの担任G先生（30代女性）が話をすると、G先生は自分で何とかすると話された。G先生が言うには、「クラスは7月から落ち着かなくなりだした」とのこと。その理由は、変わった行動をとる男子を他の男子がからかうので担任がかばうと男子たちがひいきだと不満を持ち出したとのこと。

SC1は担任に対して、次回からSCがクラスに入って様子を見て、わかったことを伝えますと話し、1学期を終えた。

次に、学級Bについて述べる。1学期終了間際に、特別支援コーディネータのS先生（50代女性）から特別支援のサポートとして学級Bに入ってほしいSC1に要望があった。S先生の説明では、

M男は教師への反抗や問題行動がいじるしく特別支援対象児であるとのことだった。しかしSC1が学級Bに入ってみるとクラスは静かで、SC1がM男と接するとM男は静かに授業をうけた。このときSC1はM男の気持ちを受け止めたので静かに授業を受けたのだと思った。

授業後、M男の友人のC男がSC1のもとへやってきて、M男が静かに受けたのはすごい。考えられないと話した。そして担任X先生への不満を語った。C男は担任が全然話をきかないなど言っていた。そして担任とSC1を比較するようにしてSC1を理想化し持ち上げた。そして放課後に担任X先生（30代女性）とM男の授業態度について話した。SC1は「気持ちを受け止めたことがよかったのではないかと担任に話すと、受け入れてもらえたと思った。しかし後に、SC1に素直な態度を示すM男の様子や、それを得意気に話すSC1の態度に担任のプライドを傷つけたのではないかと思った。

## 第2期 X年9月11日～X年9月25日

SC1来校3回（学級A＝3回、学級B＝3回） SC2来校2回（学級A＝0回、学級B＝1回）

夏休みが終わり2学期が始まった。学校は、学級Aを学級崩壊として問題視していた。校長が授業に参加し学級Aを監視する様子がみられた。また授業中に保護者が見学に来ることが度々みられた。そしてSC1が2学期の3回目のサポートに入ると担任G先生が欠勤していた。学級Aの男子児童から声をかけられ「なんでG先生は休んでるの？」「なんでやろうな」「きっとはくらのせいや」と話された。SC1は自分が学級Aというケースを担当することになったと思っていた。そのときSC2は学校が両SCの役割をわけているように感じ不安に思っていたと話す。

また特別支援担当教諭からは第1期に引き続き、学級BのM男への支援を頼まれる。

学級Bは、数名の男子が騒ぎ、女子は静かに授業を受けていた。M男が担任の揚げ足とり、C男がそれに追従する様子がみられた。M男が騒ぐと男子グループは喜んで笑っていた。SC2M男に声をかけると授業に参加した。M男はSCが根気よく話すと授業に取り組みはじめるようだと言った。SC1とSC2は感じた。

また休み時間、SC1はM男に「授業中は嫌だったね。授業中だから注意しないとイケなかった」と伝えると「授業中だから当然だと思う。先生（SC1）が一番気持ちをわかってくれる」とSC1に語った。授業中にM男が騒ぐことを喜んでる男子たちの様子を見て、M男はC男などの男子グループを気にかけて反抗しているようにもみえた。SC1はM男を叱らずに声をかけ続けたが、C男はM男が静かになってほしくないようにみえた。

そしてクラスの女子のF子からSCに「なんでいるの？」と不満そうにたずねられ、このころからF子はSC1に不満を持っているのではないかと思いはじめた。そして、休み時間にS子がM男から筆箱を隠され、男子はそれを見て喜んでた。

担任X先生は「教員としては受容的な態度をとることは難しい。自分ではM男に対応できないのでSC1にまかせたい」と話した。またF子についてたずねると担任は「F子はM男が静かになったとき喜んで私のところに言ってきたので、嫌そうにしているのは信じられない」と話した。またS子についてたずねると担任は「S子は他の子とちょっと仲が悪いみたいです」と話した。

**第3期 X年10月2日～X年10月23日**

SC1来校2回(学級A=0回、学級B=2回) SC2来校1回(学級A=0回、学級B=1回)

SC2が来校すると学級Aの担任が休職し、対策会議が開かれる。新しい担任(J先生、男性)の補充などが決まった。そして変わらず学級BのM男への支援を要請される。

次に学級Bについての話し合いがSC1抜きで行われる(校長(男性)、Y先生、担任X先生)。SC1はG先生の休職に責任を感じた。学級AについてSC間での相談や話し合いができなかったことは悔やまれるが、当時そのような連携を持つことはできなかった。

学級Bの様子は、担任に対する暴言が激しくなっており、M男、O男、C男が「うるさい」「死ぬ」「ちゃんとやれ」「しっかりしろ」「無視すんな。また無視か」などと言う。

半数以上の児童が私語をし、C男、M男、O男は席を立てて歩き回りふざける。そしてF子を中心とする女子数名がS子と言い争っているのをみかける。担任X先生は問題行動グループには近づけなくなっていた。

SC1が授業に参加した日、M男が紙くずを担任に投げつけ授業が中断し、X先生が校長を呼ぶ大事に至る。C男は「本音なんか書かへん。書いたら授業がまた中断する」とSC1に語った。

またクラスの女子F子などからSC1への直接的な暴言が出始め、クラスに入るしんどさが増した。

授業中断後、Y先生、担任、校長で話し合いがされているがSCは呼ばれず知らない間に行われていたことに不信感を持つ。また別の日にSC2が来校するとM男はSCの促しに従い、授業に取り組んだ。O男に話しかけるSC2に対して暴言で返したり、C男はSC2が近づくと逃げた。

F子他女子数名のSC1に対する否定的な態度が顕著になりはじめ、SC1に対して「キモい」などと繰り返し言い始める。SC1に担任X先生がクラスの雰囲気の原因について話すと担任がS子をかばったことが原因だと担任X先生は感じていた。

M男以外の児童の厭がしさが目立ち始めたころから、担任がSC兩名を避けているように感じ始める。

そこで、SC1は「SCが児童の不満に共感していたとしても先生のことを悪く思っているわけではない」と伝えるが通じていないと感じた。

**第4期 X年10月30日～11月20日**

SC1来校数2回(学級B=2回) SC2来校回数2回(学級B=2回)

学校は、学級Bが学校の大きな問題として扱うようになり、問題化が明確になる。学級Bの保護者懇談を実施しY先生主導のもとで行った。教師2人体制(担任X先生、新任N先生(男性))の実行。SC1へ学級崩壊に対する研修の依頼をY先生からされる。

そしてSC1はSC2と相談し研修について考える矢先に、Y先生から「研修をしている場合ではない。具体的な対策を提案してほしい」と依頼される。

SC兩名は特別支援サポート(M男)から外され、学級Bの学級崩壊サポートへ移行された。

学級Bの様子は、悪化しており、女子の問題行動が出現し、担任X先生への暴言「キモイ」「気が散るから歩かんとって」などと言う。M男は担任に対し「Xも、今年で終わりやな」「死ね」などと言い、担任を蹴る。担任の態度は一変しており問題行動に対して厳しく注意するようになる。4期からは校長が度々教室に訪れるようになり、児童を叱る。C男の態度は一変し、静かになる。

SC1は校長に対し、〈児童と担任の話し合いやSCによる授業サポート以外での対策が必要〉と話すが進展はなかった。SC1に対しF子が「もういてほしくない」「キモイ」と言い、SC1は無力さを感じる。休み時間にSC1はM男とM男と親しい女子2名と話す。「教室に戻りたくない。怖い」と語る。そして放課後に担任Xと話をしようとするが、SC1の報告だけに終わり、まったく話を深めることができない。

そしてSC2は女子グループとの関係が深まりはじめる。そしてN先生、養護教諭（女性）と話し、連携の兆しが見える。そして、F子は「S子をいじめていない。いじていると思われるのが辛い」と話す。SC2に対して校長が担任への不満を話す。担任X先生はSC両名に逃避的な態度をとるようになり、話をするができなくなる。

#### 第5期 X年11月27日～X年12月18日

SC1来校3回（学級B＝0回） SC2来校3回（学級B＝0回）

4期に引き続き、教員2人体制（担任X先生、新任N先生）の実行。5期で学校は、学級Bの新対策として算数の授業のみ2クラスに分け、担任とN先生で対応することにした。

Y先生によると、保護者懇談において、保護者から授業の進み具合を心配され、そのようにしたとのこと。SC1は進み具合が心配なのはわかっていたが、SC1としては学級崩壊対策としての意味があるのかどうかは疑問であった。そして突如として、SC両名への学級Bのサポート要請がなくなる。

SC1は、4期において具体的な対策の提案を依頼されていたので、SC両名で話し合った。そしてY先生にサポーターと担任とが話し合う時間を持つことと、エンカウンターグループやカウンセリングなどSCにできる対応を話したが、Y先生は「担任とN先生の2人体制にしたので、その提案は学校の現状に合わない」と話された。

さらにY先生はSC1にサポーターとして入って児童を叱ってほしいと要望されたが、SC1はそれを保留し、学級Bにサポートとして入ることを中止した。そしてSC2は教室に入ることにメリットがあると判断しサポートを続行する旨をY先生に伝える。SC1はSCの間でクラスに対する対応が統一されておらず、SC間が分裂していると感じはじめる。

SC2が、教室に入ることにメリットがあると判断しサポートを続行する旨をY先生に伝えた理由は、子どもの様子の把握ができることと、教室に入ることで子どもたちとつながるきっかけになると思っていたからとのこと。

休み時間に、T男とI男がSC1のもとにやってきて。「先生は前より怒るけど、雰囲気は変わってない。C男はおとなしくなった」と話した。またI男は「C男の言うことはたまに言いすぎだと

思うこともあるが共感できる」と話した。休み時間が終わるとF子がT男とI男を迎えにきたが、そのときF子はSC1のほうを見ないようにしていた。

掃除時間中にM男が裏門に向かって放尿し、周りの女子はそれを喜んでみていた。そこで、SC1はM男に声をかけ「このおしっこを一緒に掃除しようか」と言うと素直に応じた。M男から「みんなに伝わったかな?」という言葉がきかれ、M男の行動は自己アピールの一環でもあると思った。そして、そばにいたI男にM男のことを聞くと「M男は定期的に変なことをする」とのことだった。放課後、担任に状況を伝えるが話は深まらず、「気をつけます」と話した。

SC1がクラスに入ることを中止してからも、F子は「キモい。吐気がする」というように日増しに言葉がきつくなっていき、SC1への怒りが強くなっている印象を受けた。プレイルームでF子は「キモい。吐気がする」とSC1に言い、そばにいたSC2が初めてその様子を見た。その後、F子自ら友人女子を連れてSC2の元へ訪れ「S子をいじめていない。担任嫌い」と語った。

そして度々F子自ら友人女子を連れてSC2のもとへ訪れるようになった。

#### 第6期 X+1年1月15～X+1年3月17日

SC1来校6回(学級B=0回) SC2来校5回(学級B=3回)

G先生の復帰により、N先生の任期が終了し、M先生(スクールサポーター、20代男性)が代理で学級Bのサポートに入った。SC2は引き続き学級Bのサポートに入った。学級Bは担任の注意を全く聞かない状態であった。SC1は男子との関係性が深まり、男子たちはSC1に性的な話題を積極的に話すようになる。そして相談室にある熊のぬいぐるみを部屋の中で投げて遊ぶ(H男、T男、I男)。SC1に「何でクラスに来ないの?」(C男)、「またクラスに来てほしい」(M男)と語られた。

F子と親しい様子のO子がSC1を見て馬鹿にしたように笑ったり、「キモい」と言うようになる。

SC1がM先生と話すサポートの方針に対する不満と疑問やF子から「キモい」と言われているとのこと。S子へのいじめは目立たず、K男へのいじめが悪化、T男は指示されていじめている。F子は、Y先生が好きで、新学期からY先生のクラスになれなかったことについて不満を持っていたということがM先生から聞かされる。

SC2は男子の問題行動グループとの接触が増えるようになった。SC両名は、SCに対する担任X先生の拒否的な態度を感じていた。

そして現状は変わらず、年度が終わった。

#### 事例内容の追加事項

SCが派遣された最初のころ、児童たちはSC両名の「相合傘」を絵に描いたりした。

F子はY先生が好きで、担任のX先生を責め、SC1やM先生などの若い男性へ怒りを表した。

X先生はSC以外の教職員からも距離をとっている。

### Ⅲ. スケープゴート現象における概念

#### 1. スケープゴートの定義

心理学辞典によると「スケープゴートscapegoat」は、贖罪の山羊のこと。転じて、集団が危機に直面したとき、集団内の欲求不満を解消したり他の集団成員が自責の念をまぬがれるための非難・攻撃の対象となる内集団の特定の成員のこと。実際の問題解決から目を逸らすことにつながる。スケープゴートの典型的な例として、経済破綻の危機に直面したドイツで、ナチスが問題のすべてをユダヤ人の国際的陰謀のせいにしてユダヤ人を非難・攻撃したことをあげることができる。

またウェブスター博学大辞典によると、「他人の失敗や罪の責任をとらされたり、または他人の代わりに苦しめられる」人を指す。このことからスケープゴートは責任を転嫁するための身代わりであり、不満や憎悪の対象にされてしまう個人あるいはサブグループのことだと定義される。

Bion (1961) によれば、心理力動的アプローチに賛成しているほとんどの筆者は、スケープゴートが彼（彼女）が所属しているグループの投影した、望まれない側面（衝動、感情、動作、印象など）のための入れ物の役割を演じるという解釈を共有する。スケープゴートの存在は、それに対してグループの攻撃性を向けることを可能にし、そしてグループの緊張、恐怖、および不安レベルを減少させる。

Shulmanによると、スケープゴートはしばしば非常に挑発的であり、その結果、彼（彼女）自身がスケープゴート現象に活動的に参加しようとする。同様に、Eagle & Newton (Idid.) は、スケープゴートが集合的な投影同1化 (Klein, 1946) の受け皿の役割を果たし「これらのスケープゴートが、投影同1化の標的にされるための行動を示し、彼ら自身のスケープゴート現象に貢献している傾向がある」とした。

また、一般的な見解では、ある集団内で暴力・嫌がらせなどのいじめがあった時には、その対象となる人間には何らかのスケープゴータピリティ（スケープゴートになりやすい特有のパーソナリティ）があり、それが原因となったという考えがある。しかし、そのスケープゴータピリティは、具体的に見てみると特に原因となるものではなく、誰にでもあるような要素であることが多く、どんなときもどんな集団においても常にスケープゴートにされる普遍的な特性や傾向（スケープゴータピリティ）が明確にされることはない。よってスケープゴートとなりえる普遍的なパーソナリティがあるとは言えない。

以上のことから、本研究における「スケープゴート」という用語は、グループ内におけるスケープゴートの存在そのものを指すものであり、スケープゴート現象を指すものではない。

#### 2. スケープゴート現象の定義

「スケープゴート現象 (Scapegoat Phenomenon)」とは広義の意味ではグループ自体が抱える問題をグループ内の個人あるいはサブグループに身代わりとして押しつけ、結果として根本的な問題解決ができない状況を指す。また集団文化の特徴としては、規則に縛られて個人に自

由がないところや、警察や軍隊や政党のような、組織が一体となって敵と戦わなければならないような集団においてスケープゴートティングが起きやすいという経験的な推測がある。しかし、このような特徴を持つ組織においても常にスケープゴートティング現象が発生するわけではない。

以上のことからスケープゴートティング現象の発生には、スケープゴート本人の性質という観点にとどまらず、集団文化が重要な役割を果たしていると考えられる。つまり、スケープゴートティング現象発生には①スケープゴートティング現象が発生しやすい集団文化の影響②その集団文化に適応しスケープゴートティングを行うメンバー③集団においてスケープゴートにされるメンバーの相互作用が必要である。以上のことから、スケープゴートティング現象は、集団文化に適応した者が集団文化に不適応した者を排除しようとする一連の過程を指す用語と定義される。

### 3. Bionのグループ理論における基本的概念

Bion (1961) は、1946年にLondonのTavistock Clinicでのグループ活動(実験)を基本にして、グループ行動の研究についての集団理論を生み出した精神分析家である。

Bionの基本的な発見は、あらゆる“グループ活動”には「作動グループ (work group, 以下WG)」と「基底的思想グループ (basic assumption group, 以下baG)」という対照的な機能的水準が同時に存在するということである。しかし、WG、baGに用いられている「group」という用語は、「特殊な心的活動のみを包含するものであり、その作業に携わる人々を意味するのではない」(Hafsi訳)。つまり、work group、basic assumption groupという用語における「group」は心的活動のみを指すものであり、作業に携わる人々(実存する集団および成員)を指す「グループ」とは区別される。本研究では、集団文化の測定にBionの「基底的思想グループ (basic assumption group)」を用いる。これからBionのグループ理論における基本的概念である「WG」「baG」「Valency」の詳細を述べる。

#### 3-1. 「作動グループ (work group, WG)」

グループは常に2つの水準を含む心的活動を示す。第1水準の作動グループ(WG)は、①現実、あるいは「現実原則」に基づき、②グループの目的や目標、時間の観念を念頭に置き、③適切かつ洗練された科学的手段を用いて、作業を行う。このような意識的かつ表だった活動にはメンバーの「協同 cooperation」や、作業を行うために必要な訓練、知識、技能、熟練が不可欠である。WGというグループの心的活動へ参加し貢献するためにはメンバーが「協同」を用いる必要がある。

WGは、グループのメンバーが自ら「協同 (cooperation)」し、作業に不可欠な知識、訓練、経験、技能をもち、(初歩のものにせよ) 科学的な方法を用いて「基本的作業 (basic task)」(たとえば、治療、練習等) に没頭しているグループを形容する心的活動である。さらに、WGの下で活動しているグループは、作業による欲求不満に対する耐性、「経験から学ぶこと (learning from experience)」時間の流れと発達(変化)を意識したり、重視したりすることによって特徴づけられる。換言すれば、WGは、現実と関係をもち、現実原則に基づく活動である。Bionは、これらのWGの特徴が、Freudによって記述された自我の特徴に類似すると述べている。

Bionによれば、グループは、常にWG活動の条件を満たしている訳ではない。WGはグループの存続や発達のために不可欠なのだが、苦痛を伴うので、グループはそれを回避しようとする。その際に、グループが頼るのは、WGと同時に存在する、無意識的、衝動的、幻想に基づく心的活動、すなわちbaGである。baGはWGの現実原則に基づく作業による欲求不満や苦痛から逃れるための心的活動を示す。その結果、baGはWGを阻止し、両グループの間に力関係、すなわち「勝ったほうがグループを支配する」という関係が成立する。換言すれば、あらゆるグループ活動には常にWGとbaGという機能的水準、心的活動が内包されている。baGとWGには力関係があり、WGが勝っているときにWGはbaGを利用し現実原則に基づく心的活動を示し、baGが勝っているときにはWGは阻止され回避され幻想に支配された心的活動を示す。

Bionによれば、WGは「強力な情緒的衝動の特性を共有するある他の心的活動によって阻止され、回避され、ときには支持される。これらの活動は、一見したところでは混沌としたものであるが、もしそれがグループ全体の共通の諸基底的理想から発していると仮定すれば、ある程度のもままりのあるものになってくる」(Hafsi訳)とある。換言すれば、現実原則に基づくWGは、強力な情緒的衝動を示す心的活動であるbaGによって阻止され、回避されることがあり、ときにはWGがbaGを利用することによってbaGに支持されることがある。このようなグループの活動は、一見したところでは混沌としたものであるが、グループの複数の基底的理想=basic assumption (依存基底的理想、闘争・逃避基底的理想、つがい基底的理想)から発せられていると仮定すれば整理しやすくなるということである。

### 3-2. 「基底的理想グループ (basic assumption group, baG)」

baGには、3つの異なった類型がある。すなわち「依存基底的理想 (basic assumption of dependency, baD)」、「闘争・逃避基底的理想 (basic assumption of fight/flight, baF)」と「つがい基底的理想 (basic assumption of pairing, baP)」である。この3つの異なる類型を「基底的理想=ba」と称する。「基底的理想」はグループが抱く幻想に基づいている。

それぞれのbaGについて詳細に論じる前に、baGの共通点について記述する。現実に基づくWGと異なってbaGにおけるグループ活動は、幻想に基づいている。その幻想の内容は支配的になっている「基底的理想」によって異なる。また、baGの場合、時間と発達という側面が重視されず、それらに対する意識さえ欠如している場合がある。さらにbaGの下で活動しているときのグループは、「経験から学ぶこと (learning from experience)」ができないうえに、それを試みようとしてもしない。なぜなら、学習に必要な欲求不満に対するグループの忍耐力が不十分もしくは、欠如しているからである。換言すれば、baGは一定の「基底的理想」(依存、闘争、逃避、つがい)に基づいている。グループメンバーに共有される基底的理想は幻想であり、それは①リーダーシップのスタイルとそれに対するメンバーの態度、②メンバー同士の関係とグループと外部との関係、③グループの自己認知、④グループの時間の概念、⑤グループの基本的作業に関する考え等の側面に反映される。⑥経験から学ぶ能力の欠如、⑦時間と発達への無関心も特徴である。

baGは、グループに属することの体験による精神病的不安(妄想分裂的不安と抑うつ不安)に対する原始的な防衛反応と、それに伴う愚かさの特徴づけられる心的状態に相当するものであ

る。ドイツの思想家Schiller (1759) の「人間は一人ひとりを見るとみんな利口で分別ありげだが集団をなせばたちまち愚者がでてくる」(Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759) とあるように基底的想定に支配された集団の心的活動は幻想に基づいており愚かさを示すことがある。

基底的想定グループ (baG) は、作動グループ (WG) とは対照的に、現実に基づいているのではなく、快感原則や一定のグループ幻想、あるいは「想定」に基づいている。baGには、訓練、知識、技能、熟練が不要である。baG活動への参加には、「協同」ではなく「原子価 (valency)」のみが不可欠である。

### 1) 「依存基底的想定 (baD)」

baDの下でグループ全体に共有される想定あるいは幻想は、グループが未熟で、他者の援助がなければ何もできない、そして (リーダーを含む) 他者が全能、全知であると信じ込むことにある。グループが、外界を非友好的で、冷たく感じると同時に、「物質的・精神的な援助や保護のために依存しているリーダーに指示されるために集まった」(Bion, 1961: Hafsi訳) かのよう感じたり、振る舞ったりすることに相当する。

換言すればbaDの影響下にあるグループは、無力感、低い自己評価、消極性、モチベーションの低下などの抑うつ的な事象を含む心的状態に陥り、グループの形式・非形式的リーダー、セラピスト、トレーナーなどの人物を理想化し、食欲に彼らに頼っていく。しかし、このようなグループの食欲な要求、あるいは依存のニーズに満足に応じることができなければ、リーダーは、すぐグループに過小評価され、否認され、変えられることになる。リーダーに対してけっして満足しないので、グループは次々新しいリーダーを絶えず探し続ける。この場合、グループはリーダーに「最も病的なメンバーを選んで」しまうことになる。このように、baDが支配的になっているグループは、Melanie Kleinによって記述された原始的理想化、食欲、否認、羨望などの早期の精神病的 (特に、妄想・分裂的) 態勢における防衛過程によって特徴づけられる。baDにおいてグループは、リーダーを理想化し全知的、万能的な存在、能力を持っている人であると確信し、グループの依存的欲求に対する拒否を、リーダーの能力の欠如によるものではなく、グループに対する無関心や「愛情のなさ」の結果として体験する。そして、羨望と食欲の投影によって、グループはリーダーを羨望に満ちた悪い、食欲な対象、あるいは「マイナス・コンテナ (minus container)」として体験するようになる。

### 2) 「闘争・逃避基底的想定 (baF)」

闘争と逃避は一般的には正反対の反応であると思われるが、Bionはそれらを統合し、1枚のコイン (基底的想定) の裏と表のように考えた。baFグループの特徴的な幻想は、グループ内部あるいは外部に何らかの「恐るべき望ましくない対象」または「敵」が存在するので、その対象と戦う (闘争) か、それともそれを避ける (逃避) しかないという信念に相当するものである。グループの風土は、疑惑、非難、言語的攻撃という闘争的な側面と、セラピスト (あるいは幻想的な敵) に対する受身的な抵抗、長い沈黙、グループの作業回避という逃避的な側面によ

って特徴づけられる。さらにbaFにおいて、「個々」の重要性は「グループ全体」に比べて二次的である。baFグループは、グループ存続のために個々を犠牲にすることがある。それは、グループは、個人に自由を与えることによって、メンバー間の意見相違が表現され、そしてグループ内の葛藤や戦いが引き起こされることを恐れるからである。なぜなら葛藤や戦いがグループを全滅させるという不安をグループに引き起こすからである。Kernberg (1980) が述べているように、グループは「多数のメンバーに共有されるグループの観念形態に対するいかなる抵抗も許すことができない」(Hafsi, 2004)。

このような個人よりもグループを優先する心性は、原始的社会における生け贄という具体的な儀礼に相当する。いずれの場合も、グループは個人を犠牲にすることによってグループを守ろうとする。逸脱者に対してグループは、攻撃的な操作とスケープゴートに頼ることによってそのメンバーの逸脱を阻止する。なぜなら、グループにとって、個々の逸脱は脅威として感じられるからである。潜在的攻撃をスケープゴートに向けることによって、グループはメンバーの逸脱を阻止し、全滅恐怖を回避することができる。メンバーの逸脱は、一種の挑発的行為や、脅威としてグループに体験される。またスケープゴートの発見あるいは「創造」という作業はリーダーに任される。

「闘争基底的想定グループ」において「スケープゴート現象」が発生しやすく、基底的想定と一致しない原子価を示す人がスケープゴートになりやすい。(岡島, 2008)

baFにおけるリーダーは、漠然と認知される外部または内部の「敵」といかに戦うかあるいは逃げるのかに対して能力を発揮できると思われる人である。換言すれば、リーダーは、危険と敵を識別し、そして、「今・ここ」において敵が存在しないときは、それを作り出すように期待される。実際に、リーダーは、個々の反応を無視し、グループ全体の存続のために全力を尽くすこと、勇気、自己犠牲、敵に対する憎しみを促進することが期待される。このような期待に応じることができないリーダーは無視され、よりふさわしい者が選ばれることになる。なぜなら、リーダーは、支配的な基底的想定の生産物であるので、基底的想定を反映することを期待されるからである。baFにおいて一般に用いられる防衛機制は、Melanie Klein (1955) によって記述された、「分裂」(良いグループと悪い対象)、「投影同一化」、「否認」「理想化」である。分裂と投影同一化によってグループは、攻撃性とそれによる不安や恐怖(望ましくない部分)をスケープゴートまたは敵に投影し、それを否認する。その結果、グループは、「望ましい部分」を含むグループに同一化し、それを理想化し、Anzieuの言う「グループ幻想 (illusion groupale)」を示すようになる。

baFにおいてグループは、「弱さ」に耐えられず、それを軽視したり否認する。「弱さ」の存在は、個人の軽視とグループの凝集性を要求するbaFの心性に反するからである。したがって、グループはそれを感じた場合、すぐ投影同一化を用いて対処する。グループの「弱さ」を含む対象としてグループに体験されるメンバーは、グループの憎しみと怒りの標的となる。

尚、Stock&Thelen (1958)、Armelius&Armelius (1982) やHafsi (1997) の提案では、「闘争基底的想定baF」と「逃避基底的想定baFI」を別々に扱うこととしているが本論文においてもそれを採用する。これは、敵を意識しているという意味で2つのグループは同じ幻想に支配されて

いるのだが、反応の仕方が異なるため、それぞれ異なるタイプとして特徴付けられるという理由からである。baFグループは、グループ内の敵、あるいはグループ外の敵に対する批判を並べ立てることに長い時間を費やす。そして、グループの幻想に合わない発言は無視される。一方で、沈黙するメンバーがグループ内の敵として選ばれば、それを責め、理由を問いただすことに集中する。

baFIグループでは、敵と戦うことよりも、むしろその状況から逃れることが重要であると考えるので、観察されるのは、より消極的な抵抗の現われとしての沈黙、また無関係な事柄に没頭することによる作業からの逃避、会話を避けたりリラックスしたりするための冗談や笑い等である。また、退屈そうにしたり、寝ているメンバーがしばしばみられる。

### 3) 「つがい基底的理想 (baP)」

「つがい (pair)」という言葉が示唆するように、baPは、2人の関係、それに対するグループの幻想とその結果であるグループの態度と風土に関するものである。

baPは最も理解されていないものである。その理由は「つがい」という曖昧かつ誤解を招きやすい用語にある。baPは、2人のメンバーが中心的な存在として発生し、そして2人の意識的・無意識的な活動を支えていく風土がある。その2人が必ずしも男女である必要はない。また、必ずしも現実にグループのメンバーの中につがいが存在する必要はない。

グループの幻想は、グループの存続と将来が、新たに生まれてくるであろうリーダーに依存するという信念に相当するものである。Bionによれば、グループにとって、そのリーダーは、「救世主的 (Messianic)」な存在、あるいは「救世主 (Messiah)」である。この救世主は、人間とは限らず、グループを不安と恐怖から救う新しい観念、計画、提案、発明を意味する場合もある。したがって、グループは、その「救世主」の誕生を期待することという無意識的な作業にほとんどのエネルギーを費やす。グループにおけるつがいの任務は、その「救世主」を創造あるいは産むことである。

しかし、baPにおいて、つがいという明確な存在は、必ずしも不可欠な要素ではない。換言すれば、「今・ここ」におけるグループのメンバー同士によって形成されたつがいの存在が必要なわけではない。つがいの存在以外のbaPの特徴は、①未来への強い関心、希望と期待。②親しみ、過度な幸福感、楽観主義に満ちたグループの雰囲気である。

baPにおける未来への関心や意識は、「今・ここ」の作業と関係なく、救世主・リーダーの誕生への漠然とした幻想的な期待と希望に基づく感情である。

baPグループの活動の目的は、その希望の実現ではなく、それを持ち続けることである。グループは、希望の実現が希望の喪失と同等であるとみなすので、希望は決して満たされてはならない。

救世主が出現しても、グループを不安や恐怖から救うことはできないという痛ましい事実グループは直面し、そして希望や、存続する意欲を失ってしまう。したがって、グループはあらゆる方法を用いて、一生懸命にその希望を、実現の可能性から守り続ける。グループにとって救世主の出現は破壊的な出来事である。

けっして産まれてはいけない救世主に依存するというパラドックス的な信念や思考は、他の基底的想定と同様に、グループの機能不全、発達の無視などの特徴をもった心的状態、愚かさに満ちたグループ風土へ導く。

諸基底的想定はグループへの不安に対する原始的な防衛反応であると既に述べた。諸基底的想定が人間とともに存在する以上、旧約聖書を例にあげることも可能である。旧約聖書全体を通じての預言は、「救世主が来る」である。しかし、旧約聖書は、人々が「救世主」の到来を望んだところで終わっている。

### 「原子価 (valency)」の定義

Morenoは、社会の基本的構造を、原子のネットワークとして記述している。更に、Bionも、化学から「原子価valency」という概念を借用し、人間の対人関係や個人とグループとの結合の説明を試みた。Bionは、人間が、原子と同様に原子価を持ち、原子同士のように、その原子価によって結合すると考え、原子価を、「確立した行動パターンを通じて、他者と瞬間的に結合する個人の能力」また「基底的想定を創り出したり、それに基づいて行動したりするためにグループと結合していくための個人の準備状態 (readiness)」(Hafsi訳)と定義している。Bionはすべての人には原子価があり、原子価のない人は、精神的機能からみれば、もはや人間ではないと述べている。

原子価のタイプは基底的想定のものと同様であり、「依存dependency (DV)」、「つがいpairing (PV)」、「闘争・逃避fight/flight」が存在する。

しかしながら、これは、人が1つの類型しか示さないという意味ではない。人はすべての原子価を示すことができるが、自分に一番適し、そしてそれに同1化できる類型が1つしかないという意味である。

Bionは個人に一番合った原子価を「支配的な原子価」と呼んだ。その後、Bionの集団論に基づくさまざまな実証的研究を行ってきたStock & Thelenは、「闘争・逃避」を「闘争 (FV)」と「逃避 (FIV)」に分離させ、4つのタイプになるタイポロジーを提案した。上述された4つの原子価の特徴を以下に述べる。

#### 1) 依存dependency (DV)

「依存dependency (DV)」は、自分以外の頼りになる他者やリーダー、環境に依存する。また、人に受け入れられることや愛すること、グループに属することに関する強い欲求をもち、周囲に自分の行動を合わせようとする傾向がある。他にも、人の役に立ちたい願望、自己非難、低い自己評価や自尊心、過去思考、援助を必要とする人に対する過敏さや理解などがあげられる。依存の主要な特徴は、縦的人間関係や相互作用、相互作用的依存、低い自己評価、他者の過剰評価である。

#### 2) 闘争fight (FV)

「闘争fight (FV)」は、常に「敵」を意識し、「敵」に対して攻撃的で、人の上に立ちたいと

いう強い願望がある。また、自己中心的に物事を考え、他人に頼ることを嫌い、負けず嫌いの傾向がある。グループの中では仕切り役にまわることが多く、現実思考である。対人関係は、自己主張、攻撃性、敵意、競争心、批判によって特徴づけられる。

### 3) 逃避flight (FIV)

「逃避flight (FIV)」は、闘争と同様、「敵」を意識するが、「敵」に対して逃げるという行動を起こす。人と常に一定の距離を保ち、人との深い付き合いを避け、何事に関しても1人でやる傾向がある。他にも、プライバシーや私生活に触れられること、時間や予定に縛られること、人からアドバイスをされること、期待されることや、ルール、規則、決まりごとを嫌う。

### 4) つがいpairing (PV)

「つがいpairing (PV)」は、自分と他者との2者関係を重視し、親しい友達関係に対する強い欲求や、所有欲があり、孤独感を感じやすい性格のため、縦的な関係より横的な関係を望む。また、異性の友達を好み、楽観主義で、自由と平等を重視し、民主主義的なリーダーシップを好む。

つがいの対人関係は、温かい、親しい関係を好み、対象と個人的なレベルで付き合いたいという願望、小集団を好み、民主主義、平等主義、関係を性愛化する傾向があげられる。

## Ⅴ. 考察

学校は闘争基底的想定グループの状態になり、学級崩壊クラスをスケープゴートとして維持し続けたことが伺える。学級Aの担任G先生は学校のスケープゴートとなり休職した。休職後は、学級Bがスケープゴートになり、担任X先生はクラスの児童から攻撃を受け、同時に学校からも無力な教師というラベリングを受けていた。そのことがSCに対する否定的な態度、逃避的な態度を誘発した可能性がある。これによりSCが担任と話を深めるチャンスを失う結果となった。

また、学校は学級担任と学級そのものをスケープゴートとして維持していた。学級Aの問題から学級Bの問題への流動的なスケープゴートティングは、学校全体が闘争基底的想定グループとしてスケープゴートを探していたことを意味する。そしてスケープゴート維持のために、SCの活用に消極的になり、SCに対しても無力感や能力のなさを投影した。

そのことにより、SC兩名は、その無力感をお互いに投影しあい、無力感による理想化と価値下げを行い、SC間の分裂が引き起こされた。つまり、SC1が女子児童から攻撃の矛先となったときに、SC2が女子児童たちと親しくしていることによって、女子児童たちによってSCに善悪の分裂を引き起こし、SC1は自分が無力なSCであり、SC2は上手くやっているよいSCだと思う結果となった。

闘争基底的想定グループにおける分裂は、SC2がN先生、養護教諭と話し、連携の兆しが見えたときに、SC1はSC2が自分へと連携をつながなかったと思いSC2に不信感を持ったことなど、SC間で不信感がつのる要素を多く生み出していた。

そして闘争基底的想定グループにおいてつがいは恐怖の対象である。なぜなら、つがいは、新しい解決策や救世主を生むという幻想をグループに引き起こすからである。またつがいは、グループでの2者の個人的つながりや個人を象徴し、グループの全滅不安を引き起こす。グループは、個人に自由を与えることによって、メンバー間の意見相違が表現され、そしてグループ内の葛藤や戦いが引き起こされることを恐れるからである。なぜなら葛藤や戦いがグループを全滅させるという不安をグループに引き起こすからである。グループはスケープゴートを維持するために、SC兩名を男女の「つがい」と見立て、SC兩名の協同を否定するように働いた。闘争基底的想定グループによって抑えられていた児童の「つがい」の幻想はSC兩名に投影され、児童たちはSC兩名を恋人にする幻想を抱き、相談室においてSC兩名の「相合傘」などを描いた。

そして、事例末期になり男子たちはSC1に対して性的な話題を多くするようになっていたのは「つがい」の抑圧をSC1の前で発散していたようにも思われる。

またY先生や特別支援担当教諭の指示によってSCが動くことが定例化しており、振り回されていたような感覚がある。能動的に動くことができなかったことは、SC自身の未熟さと同時に闘争基底的想定グループの支配性によるかもしれない。

問題のあるクラスや人物を設定し維持し続けるスケープゴートティングは、グループにとって、「問題が発生しており、それを解決しようとしている」という努力のアピールや自己満足感を得る手段となりえる。SCはグループの無意識の欲求にまきこまれ、その問題の本当の解決から遠ざかっていた。

## 参考文献

- Anzieu, D., 1984. *Le group et l'imaginaire groupal*. Paris; Bordas.
- Bion, 1961. *Experiences in groups and other papers*. New York: Basic Books.
- HAFSI, MED (2003) 「ピオンへの道標」ナカニシヤ出版
- HAFSI, MED (2004) 「愚かさの精神分析 ピオンの観点からグループの無意識をみつめて」ナカニシヤ出版
- HAFSI, MED 「対象関係の病理学を理解する頂点としてのマイナス原子価」*プシコフィリア研究* 第3巻
- Hafsi, M., 1998., *The Group Valency Constitution, the Dominant Basic Assumption, and the Scapegoating Phenomenon*.
- 黒崎優美 (1998) 「D-グループ (Diagnostic Group) におけるグループ過程の測定法の開発、検証、および応用」(奈良大学修士論文)
- 岡島真一 (2008) 「スケープゴートの発生におけるグループ心性及びメンバーの原子価の影響に関する実証的研究」(奈良大学年報)
- 対馬忠訳著 (1973) Bion, R.f., 1961. 「グループ・アプローチ：《集団力学と集団心理療法》の画期的業績・人間援助の心理学」東京：サイマル出版会
- 西村達也 (1988) 「基底的想定とスケープゴートティング現象の因果関係」(奈良大学修士論文)
- 船越弘子 (2004) 「家族・グループの力動と摂食障害の発生～Wilfred Bionのプロトメンタル・システム理論に基づく実証的研究～」(奈良大学年報)